PREX NOW

途上国と関西をつなぐ　VOL.255

PREX
Pacific Resource Exchange Center

特集：つながりのその先へ

つながりの
その先へ。

西辻 宏道 氏
有限会社千総 代表取締役

増田 たくみ 氏
トゥーキャンコンサルティング 代表
中小企業診断士

明日につながるストーリーを。

■27歳で代表になり、今45歳。駆け抜けてきたなあという実感です。(西辻さん)

自分が代表になったのは、2002年、創業から115年がたっていましたが、高度成長期後、業界は斜陽の一路で、老舗の看板だけではやっていけない状況でした。果物屋を絶対継ぎたくないと思っていましたが、いざとなったら、ボロボロの家業を何とかしたいという気持ちが芽生えました。自分のやることに自分で責任を取りたいと思い、親族には全員辞めてもらいました。親族での経営は、どうしても、全員が社長。関係が家の延長になるからです。背水の陣で、加工食品製造事業への進出、産地と品種を製品名にするジャムを作ることに決めたのです。第2の創業でした。

■吉野の富有柿ジャム、大阪の河内いちじくジャム、そのつながりがブランド力に。(増田さん)

商品名に産地がはいると産地への愛着が生まれ、話題にもなり、ジャムを通して、果物に対する興味もでてきます。ブランド化、加工品で果物そのものへの関心をひき出していく発想の転換が、千総さんの強みだなと思います。最近では、産地と品種を製品名にするジャムを見かけますが、当時はありませんでしたよね。千総さんが最初だったと思います。一つの産地の果物で商品をつくるというのは、そこの産地の商品の供給が止まると作れないですから、リスクが高く、コストもかかるのでどこもやっていなかったですよね。

■そうですね。コストも高くなるのですが、果物屋なので、産地や品種が違うものを混ぜてしまうことにすごく抵抗がありましたね。(西辻さん)

本当は、果物そのものを食べてほしい、果物のおいしさを知ってほしいということが軸にあるので、フルーツの風味を引き出せるよう、添加物も使いません。ジャムメーカーとしてではなく、「果物屋」として商品を作っているんですよね。農家さんは、生で食べてほしい、と言いますが、それは消費者のニーズを知る機会が少ないからです。例えば、売り場に立っていると、スイカはごみ出しの前の日によく売れるとか、女性はネイルが汚れるからみかんの皮をむきたがらないという声もあります。農家さんにとっては、フルーツは年に1回の収穫のものが多く、一円でも高く買ってくれるところに売りたいですよね。そんな農家さんと関係を作るうえで気を付けているのは「安定した調達」「値切らない」ということです。安定した売り先があることで農家さんに安心してフルーツを作ってもらうことができます。

地域の特色を活かした産業振興（JICA北陸）研修の参加者と

■でも、これが、消費者に安心を与えることになり、企業や美術館からも依頼を受け、新しいジャムを作るようになりました。（西辻さん）

今は、OEMを含めると100を超える種類のジャムを作っています。去年びっくりしたのは、ツバメの巣をジャムにしてほしいという相談でした。「味ないやん！」と言いましたが（笑）。東京の美術館からは作家に合わせた展覧会用のミュージアムショップのグッズになるジャムなど、とにかく、いろんな依頼があります。依頼を受けて、ジャムづくりに関していろいろなノウハウや引き出しが増えていく、これがうちの財産ですね。

また、ジャムは農産物の加工としては、一番入り口にあるので、途上国の方に、千総がお伝えできるノウハウだと思います。ジャムという商品はシンプルなので、素材が持っているものがダイレクトにジャムになりますので。ただ、いろいろな国で、今後先進国と同様にフルーツの生食離れが進んでいったときに、加工という技術が、必要になるかもしれません。そういうときノウハウを提供することでお役に立てるといいと思っています。

そしてフルーツ離れを打破するキーワードは「子供」だと思っています。子供たちが食べてみたくなるイベントに取り組んでいきたいですね。物販は難しく、付加価値をつけにくいので、次は飲食に近い業態、フルーツを食べてもらうカフェを展開したいです。また、フルーツを食べる前の段階から知ってもらうことが大事。どんな花が咲くのか、知らない人も多いですよね。ブルーベリーはかわいくてきれいな花、秋には紅葉することも知ってもらいたいですし、フルーツ加工のワークショップなんかもしてみたいです。

■やってみよう。つながってみよう。（増田さん）

西辻さんは、いつも、前向きにやってみようと言ってくださるので、ありがたいです。つながることで、新しいことを広げていくときには、その双方の努力が必要で、利益につながるかどうか関係なくやってみようという姿勢があることが前提ですね。

「つながり」が未来をつくる。

SDGsって聞いたことありますか？

3月7日第1回上本町SDGs大学「SDGs×働く」。ゲストスピーカーには、中西金属工業株式会社　CSR統括部CSR室　室長　堂脇智子さん、株式会社PRリンク　代表取締役　神崎英徳さんにお越し頂き、それぞれのご経験や実際の取り組みについて紹介頂きました。

上本町からSDGsの輪を広げます。

皆さんは、SDGs（エスディージーズ）という言葉を聞いたことがありますか？SDGsは、Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）の略称であり、2016年から2030年までの国際目標です。持続可能な世界を実現するための17のゴール・169のターゲットから構成されています。PREXは途上国の人材を育成する研修事業に取り組んでいますが、このことはSDGsの達成にもつながります。同時にPREXの研修に協力頂いている多くの企業・自治体・団体の皆さんには、研修への協力を通じてSDGsの達成に関わって頂いています。PREXを通じて、協力頂く多くの皆さんが、それぞれのビジネスや事業の中で積極的にSDGsの達成も目指して頂けるように、SDGsへの理解をさらに深めてもらうことは、PREXがこれから積極的に取り組むべきことと考えています。その第一歩として、 PREXと同じ天王寺区上本町エリアにある「クレオ大阪中央（大阪市立男女共同参画センター中央館）」さんと協力し、今年3月から「上本町SDGs大学」を始めました！「クレオ大阪中央」はSDGsの5番目の目標である「ジェンダー平等を実現しよう」を中心に、長年活動をされていて、PREXとは異なるネットワークをお持ちです。この2団体が協力することで、より広いテーマについて話題提供と学びの場をつくりたいと思い、始めました。ここでは、SDGsを知りたい、他の方との意見交換や交流の中で理解を深めて、個人や組織でできることを考えてみたいという方に参加頂き、毎回お招きするゲストスピーカーの経験やお話をもとに、理解を深めて頂きます。さらにそこでの出会いをきっかけに、SDGs17番目の目標「パートナーシップで目標を達成しよう」についても考えて頂きたいと願っています。SDGsには「誰も置き去りにしない」世界を作る、という大きなそして素敵な理念があります。途上国だけでなく日本を含む先進国でも、日々の仕事の現場や皆さんの生活の中でも、置き去りにされている人を作らないためにSDGsの達成に向けてできることを考え、ゴールを目指し行動する人が増えるようPREXも積極的に取り組みます。（国際交流部 瀬戸口）

上本町SDGs大学 第3回「SDGs×エコの輪！」9/17（火） 18:30-20:30

場所：大阪国際交流センター 2F 会議室C

ゲストスピーカー：●坂野晶さん（ゼロ・ウェイストアカデミー理事長）　●原田六次郎さん（山陽製紙 代表取締役）

参加者募集中！PREXウェブサイトよりお申込みください。

ルワンダで
私たちに何ができるか・・・

ルワンダの首都キガリから車両で1時間半トゥンバ高等技術専門学校にて。音羽電機工業のルワンダでの雷対策は、ここからスタートしました。

アミリさんとの出会いがきっかけでした。

音羽電機工業株式会社でアフリカ事業を担当している井上です。尼崎の中小企業が、東アフリカの国、ルワンダの雷対策に貢献したいと考えたのは、2015年のインターンシップ生アミリさんの受入がきっかけでした。彼は、ルワンダのITエンジニア。Abeイニシアティブで約半年、弊社にて電気の基礎知識や雷対策の技術を学んでいました。弊社では、インターン生の受入は、担当者を決めず、社員全員が様々な面からサポートするようにしているので、アミリさんも、社員全員とコミュニケーションをとり、休みの日も社員と出かけるなど楽しんでくれていました。

雷被害の多いルワンダから来日した彼は、弊社で日本の雷対策を知り、ルワンダでもこの技術を活かし、雷から人や電気機器を守ることができるのではないかと考えるようになりました。ルワンダでは年間60人から70人が雷が原因で亡くなったり、けがをしたりしていて、家にいても雷の被害にあうというのです。

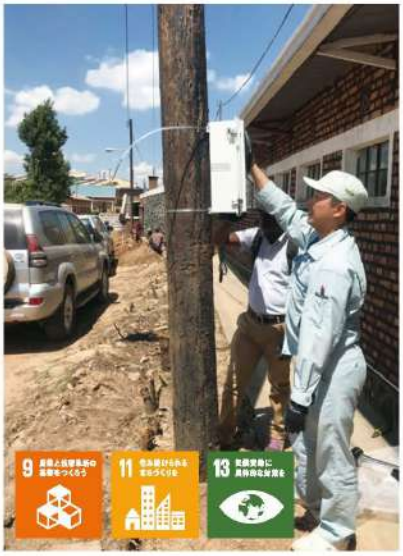
2016年4月には、ルワンダの落雷に対して弊社ができることを確認するために調査チームを派遣することになりました。

弊社は、日本で唯一の雷対策専門メーカー。社長をはじめ、ここで働く全員が、「人々の暮らしを雷から守ること」を心に持っています。しかし、派遣メンバーは、誰もアフリカに行ったことはありませんでしたし、会社として海外に調査を出すのも初めてのことでした。そこから、弊社のルワンダとのつきあいが始まったのです。

当初ルワンダ全体の雷対策をしてほしいと相談されたときは、正直、難しい、と思いましたが、アミリさんとのつながり、アフリカを専門とする方々のサポートもあり、今では、ルワンダのみならずアフリカ全土のICTや通信関連設備の雷対策に、日本の技術が活かせるのではないかと視野を広げています。

アミリさんは、ITエンジニアとして、現地で起業し、弊社の現地技術窓口として、活躍してくれています。

アフリカ事業担当の井上真二氏と吉田厚氏
様々なグッズが展示されている雷ミュージアムにて



雷センサを設置する様子

西アフリカの小さな国ガンビア政府の投資促進庁でオフィサーをしているアワです。

「JICA投資促進のためのキャパシティ・ディベロップメント（A）研修」に参加しました。ガンビアの投資促進庁は2011年にでき、私は、2012年からこの部署で働いており、2017年にオフィサーに昇進しました。この研修に参加が決まった時は、本当に嬉しくて、日本やアセアンの成長を成し遂げた様々な事例や知識を、各国研修員と共に大いに学ぼうと思い、期待いっぱいで来日しました。プログラムを通しての講義や企業訪問では本当に多くの新しい学びを得ることができました。また、同時に講師の皆様方のプロフェッショナリズムや、日本人の勤勉さや規律を重んじる精神に直に触れられたことも大きな収穫です。

今回訪問したクボタでは、創業者が1890年に日本で初めて水道管の国産化や農業の機械化を実現したということ、100年以上にわたって農業や環境に貢献し続けているということに感銘を受けました。クボタは、すべての人に笑顔を与える会社だと思いました。

ガンビアの経済の2本柱が農業と観光業であるように、国の成長を考えるとき、農業は、どの国にとっても重要です。クボタは、生産性を高める農機具を作ることで、国の農業、人々が口にする食糧の質を高めています。また、単に機材を販売するだけでなく、進出国に対して様々なノウハウの移転や人の育成にまで取り組んでいる姿勢に感動しました。

気候変動は、私たちの生活に影響を与える世界的な課題です。どの企業も環境への配慮が求められますが、クボタはこの点でも技術の向上に取り組んでいます。

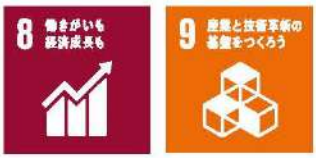
今回の多くの学びを自分だけのものとはせず、ガンビアの仲間たちと共有することで、少しでも国の発展に貢献したいと思います。

（アワさん ガンビア投資促進庁）

クボタ・堺製造所ショールームにて

講義を聞く研修員

※アワさんが参加した研修は、SDGsでは以下の分類となります。



将来我々のサポート役を
担って頂ければ嬉しい限りです。

株式会社クボタの金子です。研修員の皆様の今後のご活躍を祈念致します！

今回は弊社のトラクタ工場を視察頂くと共に、海外進出における直接投資の事例に関してお話しさせて頂きました。さらに、我々の企業理念の一つに、「豊かで安定的な食料生産への貢献」というのがありますので、その内容も紹介しました。
クボタでは1980年代よりODAにて新興国向けに農業機械を輸出しており、新興国とは長い付き合いを有しています。一方で、我々の会社概要や海外進出事例をそれらの国の方々に紹介する事は普段あまりないため、このような機会を頂いたことを大変喜ばしく思っています。
今回の研修員の生活エリアは都市部のため、我々の製品をイメージすることが難しかったと思いますが、講義当初より研修員から鋭い質問が飛び交い、活発な意見交換の場となりました。この講義を通じて少しでも日本企業の新興国での取組みを理解頂き、将来我々のサポート役を担って頂ければ嬉しい限りです。ありがとうございました。

お世話になったクボタの皆さんとの記念写真です

ソマリアのディリエさんから見学に対してお礼のスピーチ

大型ハーベスターはとってもカッコよくて研修員に大人気

NEWS &TOPICS

今月号は、「つながりのその先へ」をテーマとし、人と人のつながりから、新しい商品や新規事業、学びが生まれた事例をお届けします。取材させていただいた皆さんは目の前にいる人にどう役立てるのか、ということを大切にされていました。読者の皆様のご経験や、感想もぜひお聞かせください。お待ちしています。
E-mail: prexhrd-pr@prex-hrd.or.jp

日本で一番人口の少ない鳥取県の中で、一番人口が少ない江府町を訪問！

7/1、「JICA持続可能な観光地域づくりのための人材育成　日本のおもてなし研修」でアルバニア、ブータン、ボスニア・ヘルツェゴビナ、ラオス、マレーシア、フィリピン、スリランカ、東ティモール、チュニジアの研修員が鳥取県江府町を訪問。町とサントリーホールディングスが協力して取り組んでいる観光振興や人材育成を学びました。研修の様子は日本海新聞に取材頂きました。

サントリー天然水奥大山ブナの森工場を見学。
「規模の小さな自治体が企業と連携している点に驚いた！」
（アルバニア政府観光局アリオラさん）

道の駅奥大山を視察。
日本海新聞から取材を受ける研修員。

北陸の伝統工芸、織物の技術を体験した研修員！

7/1～26日の「JICA地域の特色を活かした産業振興研修」では北陸地域を訪問。水引を使ったアクセサリーや空間インテリアや2千年前に起源があると伝わる能登上布の魅力に触れました。研修員は「素晴らしい技術」「海外にもアピールしてほしい」などと高く評価しました。

金沢市の希少伝統工芸「水引細工」を装飾品から空間インテリアへ商品開発する自遊花人で水引づくりを体験。

石川県無形文化財の高級麻織物「能登上布」の織元「山崎麻織物工房」を訪問。

PREX ウェブサイト「世界は人でできている」スタッフコラム スタート。

PREXのウェブサイトでは「世界は人でできている」をテーマに日本企業の皆様や研修員からのSDGsやカイゼン、仕事の流儀に関するコンテンツを紹介しています。PREX全職員のコラムもスタートしました！ぜひご覧ください。
※左は前田（智）職員のスタッフコラムの写真で「ラマダン」について紹介しています。

途上国に未来を蒔く。

PREXについて紹介頂きました。

NPO団体の情報発信をサポートするフリーペーパーUTの最新号でPREX山内職員のインタビュー記事が掲載されました。

おススメ図書ご紹介

PREXでは、研修員の学びの質を高められるように、「ナレッジ・マネジメント」や「アクティブ・ラーニング」等の局内勉強会を行っています。講師の林俊行先生から、本をご紹介頂きました。よい質問を見つけることが、主体的で自立的な学びにつながるという内容で、どなたにとっても、ものの見方を深めるヒントがあると思います。

PREX NOW第255号（2019年9月発行）
編集・発行：公益財団法人 太平洋人材交流センター
専務理事・事務局長：岡本　譲
〒543-0001 大阪市天王寺区上本町8-2-6
大阪国際交流センター2階　TEL.06-6779-2850
ホームページ：http://www.prex-hrd.or.jp
E-mail:prexhrd-pr@prex-hrd.or.jp
企画制作：ユナイテッド・トゥモロー